



鐘の音

NO. 38

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2026.3.23

はじめに

時の流れは早いもので、まもなく年度の終わりを迎えようとしています。春の訪れを感じるこの頃、院生は学修や研究のまとめ、そして次年度へ向けた構想等に力を注いでいます。

今号では、教職大学院での思い出をはじめ、忘年会やフォーラム、歓送会を振り返ってといったテーマで原稿を頂戴いたしました。1年間の歩みの集大成としてご覧いただければ幸いです。

冬季オリンピックに想う

教職実践専攻(教職大学院)

専攻長 佐藤 修司

教職大学院の修了というゴールに到達されたみなさんに、心からのお祝いを申し上げます。

みなさんの1年、ないし2年間の苦勞の成果が、教職修士(専門職)という専門職学位や、専修免許状として得られたこととなります。努力が実を結ぶということであると、今回の冬季オリンピックでの日本選手の活躍も同じかと思えます。特に、フィギュアスケートのりくりゅうペアのフリーでの歴代最高得点にはみなさんも驚かされたのではないのでしょうか。前日のショートの失敗での絶望から立ち直ったということがみんなに感動を与えたと言えるわけですが、逆に、失敗のおかげで、金メダルを取らなければならないという重圧から解放された側面もあるかもしれません。

そういったいろいろなドラマがあった今回の冬季オリンピックを見ていて感じたこと三つをみなさんに贈りたいと思います。第一は、あきらめないこと、失敗を失敗に終わらせず、失敗から学び、挑戦し続ければ成功に至るんだということです。授業の中でも言ったことがあります、トンネルの中にいる人は、トンネルに出口があることも知

らなければ、いつまで続くのか、どれくらい暗くなるのかも分かりません。トンネルを抜けたことのある人こそが、その経験を語り、伝える必要があるのだと思います。オリンピックを観戦することもその効果があるでしょう。

第二は、このような感動や共感、ロボットやAIからは生まれにくいことです。オリンピック選手の姿が多くの人に感動を与え、希望を与えるのは、そこに至るまでのたゆまぬ努力とともに、数知れぬ失敗やミス、絶望や苦しみ、ケガを乗り越えてきたつらい経験と強い精神力を感じ取れるからでしょう。選手に失敗やミスがありえるからこそドラマが生まれるのであり、それだからこそ、会場やテレビの前の観客も、選手に失敗やミスがないように祈り、応援するのだと思います。AI時代に重視されるべきなのは、人間の強さではなく、弱さです。弱さを否定するのではなく、大事にしてほしいと思います。

第三は、第一のことと逆のように見えますが、あきらめを否定しないことも重要だと思います。失敗してもあきらめずに努力し続ければ必ず成功

に至るとい言説は、オリンピックのインタビューだけでなく、偉人伝にもよく出てきます。しかし、それは一握りの成功した人たちの経験から生まれたもので、そうならなかった、多くの人たちの言葉が表に出てくることは圧倒的に少ないのです。「頑張れ」という言葉と同様に、「あきらめるな」という言葉も、心が弱っている人には脅迫的に響くでしょう。無理しなくてもいい、そのままでもいい、安心していい、大丈夫だよ、といった声かけと、そっと寄り添ってあげることが重要です。

自分に甘くではいけません、自分にだけは優しくありたいですし、弱い自分を否定するのではなく、認めてあげたいところです。前に踏み出す勇気はそこから生まれます。また、自分に優しくできなければ、他人にも優しくはなれません。虚勢を張り、強がり合い、牽制し合うのではなく、弱さを共有し、支え合い、励まし合える仲間、クラス、学校、社会を創りたいところです。院生室はみなさんにとってそのような居場所だったのではないのでしょうか。これから巣立っていく新しい学校や職場を、今までの院生室のような温かな場所にしていけることをみなさんに期待しています。

「研究する」ことは、なんと楽しいことでしょうか・・・

教職実践専攻(教職大学院)

教授 前原 和明

2019年4月に秋田大学に着任し、あっという間に7年が過ぎ去りました。大学教員として働くことは初めてのことでしたので、大学のルールや制度など、わからないことばかりでした。「聞かぬは一生の恥」と心に決めて、臆することなく、同僚の先生方の部屋に押しかけ、様々なことを教えてもらいました。このような中で、2023年からは、大学院に所属を移し、大学院生の研究活動を支える立場に就くこととなりました。

さて、これを読んでおられる皆さんは、「研究」ということに、どのようなイメージをおもちでしょうか？

大学院に在籍されている院生のみなさんは、もしかしたら研究をしたくて進学したかもしれませんが、「研究は楽しいものだ」と思われているかもしれません。一方で、教職大学院ですので、もしかしたら「研究は苦手で・・・」や「研究よりも実践を極めたい」という方もいらっしゃるかもしれません。

私にとって、研究は楽しいものです。研究では、「何かを調べ、理解すること」の快感や「同じ志を持つ研究者や院生の皆さんとの議論」における満足感などを得る機会がたくさんあります。これを感じられた日々は楽しいものでした。おそらく、研究の苦手さや実践への指向性などを持たれてい



たとしても、実践に携わっていたら、このような感覚を理解していただけるのではないかと思います。実践の中で得られる「目の前の方を支えるための工夫を考え、調べること」、「それを同僚と共有して、あーでもない、こーでもないと話しかうこと」を通じた満足感とも類似するのではないかと考えています。

実験室での実験ではなくて、実践現場とつながりを持って進めることができた研究活動は、本当

に楽しいものでした。間違いなく、秋田大学では、このような楽しさをたくさん得ることができました。

この楽しさを、大学院生のみなさんと少しでも共有できていたら幸いです。どうでしょうか？

もしこの楽しさを、まだ得ることができていないのであれば、大変もったいない。ぜひ楽しさを求めて、研究の世界にも飛び込んでみてください。

全ての方へ。「ただ、ただ、感謝。」

教職実践専攻(教職大学院)

客員教授 越中谷 俊悦

新型コロナ禍の令和3年4月に、実務家教員として着任した私は、次のことを主な職務内容としてきました。そして、この3月、5年間の勤務を終えて退職いたします。

- (1) 学部卒院生1年次の「リフレクション」(年間20回前後)の実施
- (2) 学部生2年次の「主免Ⅰ期教育実習事前事後指導」(年間8回)の実施、運営
- (3) 学部生3年次の「主免Ⅱ期教育実習ガイダンス」(年間1回)の実施
- (4) 依頼を受けた講義での指導、教職自主ゼミでの指導

(1)では、学部卒院生が、たった1年間という短い期間であっても、心構え次第では、「教科指導」「生徒指導」等の指導力をぐんと伸ばすということをととても強く感じました。

(2)(3)では、毎年どちらも約100名ずつの学部生と「リフレクションカード」等でやり取りをし、そのやり取りを通じて「教育実習生としてのたくましさ・変容」など、教育実習だからこその人的な成長を強く感じてきました。

(4)では、教員採用試験を目前にした院生や学部生と互いに学びを深め合いました。これまでの多くの出会いに感謝し、最後は今後の御活躍を願い「エール」を贈ります。



□4月からは「職場の誰よりも心のフットワークがよい人」に

□4月からは「助言力」を磨きましょう

□4月からは「こまめにメモをとる人」に

□4月からは「職場内締切りは厳守」しましょう

□4月からは「児童生徒としっかり向き合い、面倒見のよい先生」に

□4月からは「これまで以上に目的的」で

教職大学院での一年間の学び

学校マネジメントコース
現職院生1年次 菅 徹

二月の森吉山阿仁スキー場。仲間と乗り込んだゴンドラの窓の外には、青空と樹氷が広がっていた。その景色を眺めると、日本海メロンマラソンやあきたこまちリレーマラソンで味わった高揚感、研究室の仲間と開いた誕生日会、講義の合間の何気ない会話や笑顔など、この一年間の大学院生活が鮮やかに蘇る。この一つひとつの時間が、大学院生活を彩り、互いに支え合う関係の土台になったことを強く感じる。

現職教員の皆さんとは、校種を越えて現場での切実な問いを分かち合い、多くの新しい気づきを得た。また、ストマスの皆さんの、学問に真摯に向き合う姿勢や、資料作成や発表に取り組む姿には、いつも背中を押される思いだった。こうした多様な交流に支えられ、刺激を受けながら学びを積み上げることができた。

授業では先生方から、自らの研究を進める上で大きなヒントをいただいた。授業のあちこちに示される先生方の考え方に触れる度、日々の判断の土台には揺るぎない根拠が必要であることを学び、

自分自身の在り方や学校組織のあるべき姿を考え直す契機となった。

よく「予測困難な時代」と言われるが、この一年は想定外の環境や出会いの中にこそ大きな学びがあることを実感する時間となった。互いに支え合う関係が大きな力となり、そこで乗り越える力を磨くことができたからだ。4月からの新たな環境でも、この学びを力に変えて前に進みたい。

最後になるが、大学院生活を終える今、この一年がいかに贅沢で貴重な時間であったかをかみしめている。共に学んだ仲間、温かく導いてくださった先生方、そしてこの学びを支えてくださったすべての方々に、心から感謝の気持ちを伝えたい。



今まで支えてくださったすべての皆様へ感謝を込めて

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生2年次 渡部 温子

私が大学院への進学を考え始めたのは、学部4年次生になる直前の春休みでした。教員採用試験の勉強に励んでいたある日、体調を崩して入院してしまったことがきっかけでした。

私は、生まれつき体が強くなく、幼少期から入院を繰り返してきました。そうした中で、家族

や友人、医療関係の方々や、当時の学校の先生に、幾度となく心身を救われて生きてきました。当時の学校の先生方は入院したときにお見舞いに来てくださったり、学校に復帰した後も体調を気遣ってよく声をかけたりしてくださいました。大学に入学し、教職について学び、自分がどれだけ多く

の方々に支えていただいていたのかを改めて感じました。

半月にわたる入院生活は、幼少期の経験を踏まえ、「今度は自分が、それぞれの事情や様々な困難を抱える子どもたちに寄り添う立場になりたい」「これまで支えてくださった方々に、『あの子を助けてよかった』と思ってもらえるような人生を歩みたい」と、勉強に励んでいた矢先の出来事でした。大学に入学してからの3年間、様々な経験を積み、体力をつける努力をしてきたにも関わらず倒れてしまい、当時は「自分に教師を目指す資格があるのか」と悩み、諦めかけましたが、最終的には諦められずに大学院への進学を決めました。どうしても目指すならば、自分はより多くの実践経験を積んで、心身を適応させてから現場に出るべきだと考えたからです。

教職大学院で過ごした2年間は、たくさんの学びがあり、本当に楽しくて、毎日充実していました。講義や行事、インターンシップ、学校訪問、授業参観、学会や研修会、ボランティア活動への参加などによって、自分の大きな課題の一つであった、体力や精神力を向上させることができたと感じています。院生室での日常的なコミュニケーションの中にもたくさんの気付きや学びがありました。授業力等、学部時代に学んだことを含め、自分の中に落とし込んでいく機会をいただきまし

た。様々な人と関わる中で、幾度となく自分の不甲斐なさを感じつつも、どうすれば楽しく深い学びのある授業ができるのか、子どもとどう接すればよい関係性を築くことができるのか、「もっと学びたい、早く実践したい」という気持ちで過ごすことができた時間は、本当に幸せなものでした。あつという間の2年間でした。

最後になりますが、これからの人生は、これまで支えていただいたすべての皆様への恩を忘れず、上手くいかないことがあっても折れずに生き延びて、自分と周りの方々を大切に思っていて過ごしていきたいと思います。今まで本当にありがとうございました。



忘年会を振り返って

学校マネジメントコース
現職院生1年次 斎藤 明

12月末、教職大学院にて忘年会が開催されました。その活気ある席で、私は、大学院の講義「学校組織文化の形成」で議論を交わした「かたい学校」と「やわらかい学校」というテーマを思い起こしました。学校組織は、前年度踏襲が続いたり、ルールや形式を守ることで自体が目的化したりする

ことで、黙っているといつの間にか息苦しい「かたい学校」になってしまう危うさが常にあります。そのため、いかにして柔軟な「やわらかい学校」へと変容させる仕掛けを作っていくかが重要となります。講義内の議論では、職員室のフリーアドレス化、会議の削減、コミュニケーションの場の

積極的な創出、さらには若手に役割を与えて挑戦を促すなど、現場の空気を変えるための具体的なアイデアが次々と出されました。中でも、ある院生が発した「飲み会は組織文化を映す鏡である」という言葉は非常に印象的でした。飲み会の場において、笑いが絶えない楽しい話題を共有し、共に盛り上がることの必要性を訴える内容でした。

今回の忘年会を振り返ると、まさにその「やわらかい組織」を見事に体現した場であったと感じています。自然と多様な話題で笑いが起こり、途

中で行われた席替えによって、また違う人と対話を深めることができました。この席替えは、講義で提案された「フリースタイル」に近い効果をもたらす仕掛けであり、大学院での学びが飲み会という場にもしっかりと活かされていることを実感しました。現職の教員として現場に戻った際にも、単なる親睦にとどまらず、こうした「やわらかい組織」の文化を意図的に創り出す視点や仕掛けを大切にしていきたいと考えています。

フォーラム発表を終えて

学校マネジメントコース
現職院生1年次 堀川 るり子

大学生以来、何十年ぶりかの研究に挑んだこの一年でした。そもそも自分に研究などできるのだろうか、という不安から始まり、手探りの毎日。それでも、2月14日、第17回あきたの教師力高度化フォーラムで無事に研究成果を発表することができました。1年前の自分には想像もできなかった光景でした。

私の研究テーマは「特別支援教育の校内支援体制」です。勤務校の担任の先生方へのインタビューに多くの時間を費やしましたが、その中で、一人一人が子どもたちに向ける深いまなざしや揺るぎない教育観に触れることができました。言葉の端々ににじむ思いに触れるたび、研究以上の学びを得ていることを強く実感しました。

そして忘れられないのが、フォーラム直前に現職教員だけで行った自主的なプレ発表会です。2日間にわたり、互いのスライドを見合いながら、よさを丁寧に伝え、課題も率直に指摘し合いました。「そのスライドはいらない」とバツサリ言われる現職教員もいましたが、そこには相手を思う気持ちと、よりよい発表にしたいという真剣さがありました。温かさや厳しさが同居する、まさに「学び合う集団」の姿がそこにはありました。本

番直前までスライドをブラッシュアップし続けた日々は、今思えばかけがえのない貴重な時間です。

当日のストマスの皆さんの発表は、自分の課題意識をまっすぐに見つめた研究ばかりで、児童生徒にとってよりよい学びをつくりたいという願いが一つ一つに込められていました。また、他の現職教員の発表も、今の教育界の大きな課題に真正面から向き合うもので、多くの示唆を得ました。4月からは再び現場に戻ります。こうして得た学びをこれからの学校現場での実践や組織づくりに還元し、子どもたちと教職員が成長できる環境づくりにつなげていきたいと感じています。

最後に、これまでご指導いただいた先生方、教職大学院で共に学んだ現職教員、ストマスの皆さんに心より感謝申し上げます。



現職教員だけのプレ発表&意見交換会

歓送会を振り返って

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生1年次 草薙 魁

このたび、ご退任される先生方及び修了される現職院生・大学院2年生の皆さまをお送りする令和7年度秋田大学教職大学院歓送会を開催しました。当日は教員と院生が集い、それぞれの歩みを振り返りながら、和やかな雰囲気の中で節目のひとつときを共有しました。

本会は、大学院1年生が中心となって企画・運営を行う予定ではありましたが、準備の段階から昨年度の経験がある2年生の先輩方から多大なるご協力とご助言をいただきながら準備を進め、当日も企画班以外の1年生も快く協力して下さったおかげで開催に至ることができ、幹事として準備に関わる中で、多くの方々の協力によってこの会が成り立っていることを改めて実感しました。

歓送会では、ご退任される先生方への記念品贈呈が行われ、これまでのご指導や温かいご支援への感謝の気持ちが贈られました。また、先生方からは、院生との関わりなどを振り返りながら、教育に携わる私たちへの励ましや期待の言葉をいただきました。長年にわたり多くの院生を導いてこられた先生方の言葉は、参加者一人一人の心に深く残るものとなりました。



続いて、修了生への記念品贈呈が行われ、これまでの研究や学びへの労いと感謝の気持ちが贈られました。修了生代表挨拶では、現職院生と2年生それぞれの代表者から大学院での学びを通して得た気づきや、校種や立場を越えて交流してきた院生同士の支え合いについて語られ、会場は温かな拍手に包まれました。

本大学院には、さまざまな校種や教科の院生が集い、それぞれの実践や経験を持ち寄りながら学び合う環境があります。今回の歓送会は、そうしたつながりの大切さを改めて感じる機会となりました。退任される先生方、そして修了される皆さまの今後のご活躍とご健勝を心よりお祈りするとともに、大学院で築かれた学びと縁がこれからも広がっていくことを願っております。



結びに

この度は、暁鐘の音第 38 号をご覧いただき、ありがとうございます。今号では、教職大学院での思い出や 12 月以降の行事などに焦点を当てて原稿を依頼させていただきました。皆様にご協力いただき、年度の集大成ともいえる暁鐘の音を作り上げることが出来ました。寄稿にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

春は出会いと別れの季節でもあります。別れは寂しいものですが、それぞれの新たな場所でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

暁鐘の音 第 38 号 編集担当 目黒寧



修了おめでとうございます

2026年3月22日
ミルハスにて

